

(4)スタッフより

子供の本心を見つける

國學院大学 佐々木 大知

私はこの「あかぎ無限大キャンプ」で、子供たちの本心を大切に行動するために、ふりかえりシートを重点的に確認しました。ふりかえりシートには子供が今日1日どう感じたのかが詳しく書いてあるため、どう行動するべきかを明確にすることができました。話し合いで子供の感想を掘り下げられるような問いかけが、子供の本心を見つける始まりなのだと感じました。

人と関わる一瞬を大切に

神奈川大学 大後 双葉

私が無限大キャンプで感じたことは、「人と関わる機会は偶然で一瞬」であるということでした。

小さな関わりでも人によっては大きな影響を与えていること、人それぞれに適した関わり方があるということを改めて感じることでできたキャンプでした。

たくさんの人に出会い・関わることでできたこの機会にとっても感謝しています。

目標に向かって

東京家政大学 稲村 紗彩

無限大キャンプを通じて、皆で同じ目標に向かって協力し支え合うことの大切さを学びました。もちろん一人ひとり性格や能力は違いますし、個人の目標も違うと思います。しかし「無限大キャンプを最後までやり遂げる」という目標は皆同じです。

今後は、今回のキャンプで学んだことを生かし、常に自分の目標を明確にして初心を忘れることなく様々なことに挑戦していきたいです。

良いファシリテーターであるために

東京家政大学 平松 華歩

これまでは組織の中でも意見の受け手であることが多く、自ら積極的に他の人の意見を引き出そうとしてこなかったが、青木先生の講義を受けて、組織として限られた時間の中でよりよい結論を出すために必要な立場であるファシリテーターの重要性を知りました。講義内において実際に練習をしてみて、立場が変わると自らの視点の角度も変わってくることを実感し、日常的に意識しようと考えることができました。

向き合うということ

文教大学 三井田 奈々

私は今回の「あかぎ無限大キャンプ」とおして真剣に子供たちとも自分とも向き合うことができました。子供たちとのふりかえりの場面では、意見を出している子供以外の様子も観察し、次の日の活動に生かすことができたと思います。私にとって忘れられないとても素敵なキャンプになったと感じています。本当にありがとうございました。

成長は無量大

東京家政大学 大森 正恵

青木先生から教わった学びの中に、ボランティア側が促した成長は成長では無いということを知りました。子供たちが積極的にお手伝いをすることや、協調性を大事にすることは、私たちが促して行ってもそれは指示に従っただけであって、成長ではないということを実感しました。子供たちが主体的に行動することを意識し、見守る中で、声かけが活発になるなどの自主性を見ることができました。

あかぎ無限大キャンプを終えて

東京家政大学 吉川 優花

子供たちとどう関わっていくのか、ボランティアとして、何が自分にできるのかを絶えず考え続ける日々でした。日を追うごとにグループ内で仲間との結びつきが強くなる一方で、グループ内で意見の衝突が生じることもありました。青木先生の講義で教わったボランティアの役割を意識しながらグループ内のリーダーとして時に指導を行ったり、話を聞いたりすることで子供たち同士のコミュニケーションを促進させることができました。



おわりに

新型コロナウイルス感染症が終息しない中、長期自然体験活動事業の実施を決断することは、勇気が必要です。そして担当者自身が納得する十分な準備を行うことが必要だと考えます。当たり前のことですが、事業担当者は、何度も実地踏査を行い、参加者の事前キャンプでの体力を考慮して、本キャンプの前にも実地踏査を重ねました。この準備があったからこそ、突発的な問題にも対処できたと考えます。「事業の準備は、いつも120%」と思っています。

おかげさまで、コロナ禍ではありましたが、24名の募集に対して42名の応募がありました。「限界突破キャンプ」からの事業継続が浸透してきていると感じました。今年度は、登山活動中心から屋外のグループ活動中心に変更したこともあり、体力に自信のない小学生の応募も増加しました。この事業をきっかけに体力に自信がなくても「自然体験活動」の楽しさに気づいてほしいと願っています。

また、今年度1か月後においても脈絡膜厚の増加が維持されており、キャンプの効果が持続されている可能性が示唆されたことは、共同研究において、大きな一歩だと捉えています。

豊かな人間性を育む長期自然体験事業を推進するためには、職員だけで企画するのではなく、「推進委員会」を設置し、企画の段階から委員の先生方にご意見をいただき、実施することが重要です。今年度も委員の方々に、「ボランティア研修キャンプの講師」、「本キャンプの視察」等、多大なご協力をいただきました。

この場をお借りして、本事業にご協力いただきました委員の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和5年1月 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子

後援：群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、埼玉県教育委員会、栃木県教育委員会、茨城県教育委員会
協力：群馬テレビ、上毛新聞
共同研究：慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラム

令和4年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	松村 純子
次長	齊藤 裕徳
主任企画指導専門職	渡邊 秀幸
企画指導専門職	竹内 正則/小林 大輔/杉山 直弥/中山 太平
主幹兼事業推進係長	福岡 公平
事業推進係員	小林久瑠美/小野 北斗 阿佐美幸子/寺田 里美/吉田 賢/高田 真美/小沼 朋暉
総務係長	逸見 博俊
総務係員	鈴木 和子/松井莉乃羽
管理係長	長谷川敦子
管理係主任	白石 崇尋
管理係員	佐藤 順彦/新藤 祐司
学生サポーター	細田 希星